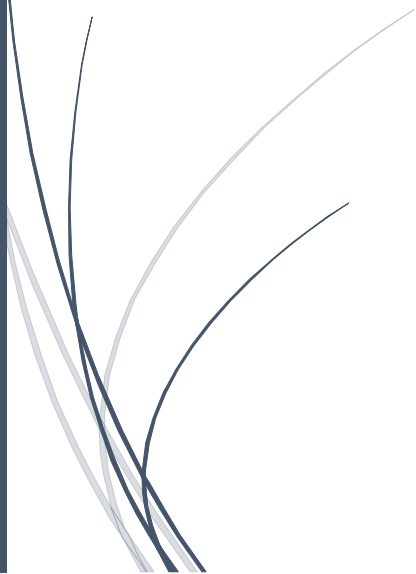


M 属性、開発中

～S な彼氏はベターハーフ～ 4～



滝上さんに会うのは一カ月とちよつとぶりで、彼の顔を見ただけで胸が高鳴った。

「久しぶり……こんばんは」

近づく私の姿を滝上さんが少し目を細めて眺める。

白いノースリーブとひざ上丈の水色のフレアースカートで、爽やかに装ったつもりな
んだけど……。

気に入ってもらえたかな？

そう思って滝上さんの様子をうかがうと目が合って、滝上さんはニツと笑った。

「かわいい。似合ってる」

良かった。

誉めてもらえて自然と笑顔になる。滝上さんは助手席を手で示した。

「乗って。ドライブしよう」

滝上さんの車の中はすっきり片付いていて余計なものがほとんどない。低く流れるF

Mラジオの音が車内を満たす。

私は助手席に座って、隣でハンドルを握る滝上さんをちらりと見た。

しばらくぶりに見る滝上さんはやっぱりカッコよくて、ああ、好きだなあと思う。

「どこに行くの？」

車は少し走ると首都高に乗った。

「いいところ。キレイな夜景、見に行こう」

滝上さんはそう答えて、片手を伸ばすと私の手に触れる。

私も滝上さんの手に触れ、軽く指を絡ませた。

温かくて大きい手のひらの感触に安心する。

私たちは、他愛ない雑談をしながら車の少なくなった夜道を走った。

しばらく走ってから高速を降り、最初の信号で止まったところで、滝上さんが前を見
たままです。

「ねえ咲良ちゃん。そのダッシュボード、開けて」

「うん」

言われるままにダッシュボードを開けると、水色のポーチが入っていた。

「中、あけてごらん」

そう言われてポーチをとりあげると、ずしりとした重さがあった。なんだろうと膝に
のせてファスナーを開く。

「……っ、これ……」

中を見て、私は言葉を失った。

「この間。使ってみたって言ってただろ」

ポーチの中にはピンク色のバイブが一本、入っていた。

呼吸を止めて大人の玩具を凝視する私の隣で、滝上さんが明日の天気の話でもするよ
うな調子で言った。

「せっかくの咲良ちゃんのリクエストだから、絶対叶えてあげたいと思って、この間買
った」

「……」

それはリクエストというよりは、言わされたといったほうが近い。ギリギリまで追いつめられて、つい出た本音だけれど、そのあとすぐに絶頂を迎えて何もかもわからなくなつたから、あれは半分夢だつたんじゃないかと思つていたくらいだったのに……

夢じゃなかつたうえに、滝上さんはしっかり覚えていた。しかも私には誰にも言うつもりもなかつたとんでもない欲望を、よりによって彼氏に言つてしまったのだ。

恥ずかしすぎて顔が熱くなる。うつむいたまま何も言えずにしていると、滝上さんがいつもと変わらないごく普通の調子で言つた。

「咲良ちゃん、俺としたくて、たまんなかったんだろ？」

「……滝上さん」

「これから、いいところに連れてってあげるけど、それまでもうちよつと時間かかるんだ。——だから、咲良ちゃん、先にそれで遊んでなよ」

滝上さんがちらりとこちらを見て、にっこりと笑った。

「……あの、……私っ」

心臓が急速に高鳴っていく。

シリコンで出来たいやらしい玩具が入ったポーチを膝の上に乗せて、私はごくりと生

唾を飲んだ。

「咲良ちゃん、使ってみたかったんだよな？ ……できるだろ？」

嫌、とか。ダメ、とか。

そういうのを受け付けない雰囲気の声でそう言われて、私は膝の上のバイブに視線を落とした。

「それで、気持ちよくなって、可愛い声聞かせて」

滝上さんがとびきり優しい声でいう。

「大丈夫。このあたりは、あんまり人いないから」

確かに車の外は無人で、車は信号に引っかかることなく左右に住宅街が広がる国道を走っていた。

「ほら。咲良ちゃん」

「……………」

ごくりと口の中にたまっていた唾液を飲み込むと、滝上さんの声に背中を押されるように、私はポーチからバイブを取り上げた。